

# 安楽寺だより

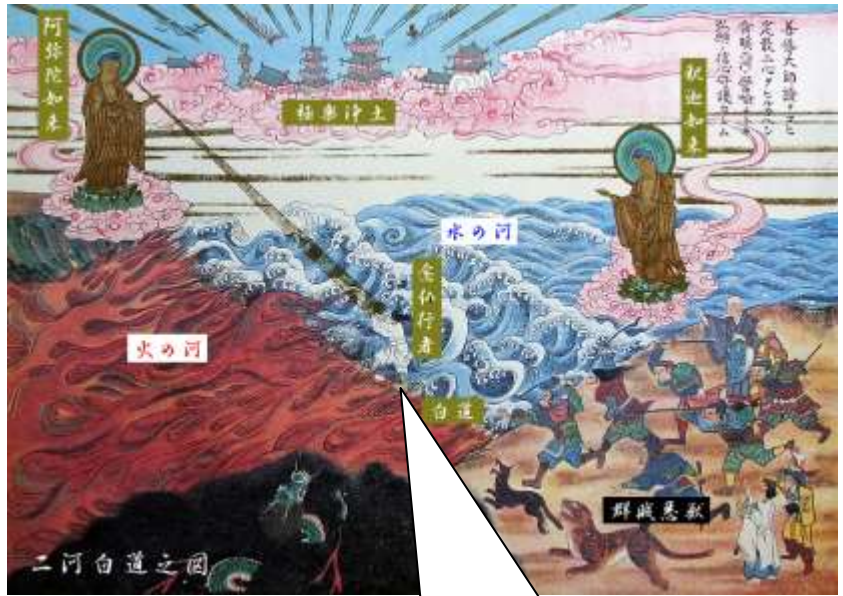
第 27 号

紙面内容

- 2面 二十二組同朋大会が開催される
- 3面 八事靈園墓で春彼岸法要勤める
- 4面 日本仏教史⑩ 江戸時代(下)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良  
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇  
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

## 二河白道のたとえ その①



人ありて西に向かいて行かん・・

譬えば、人ありて西に向かいて行かんと欲するに百千の里ならん、忽然として中路に二つの河あるを見る。一つにはこれ火の河、南にあり。二つにはこれ水の河、北にあり。二河おのおの闊さ百歩、おのおの深くして底なし、南北辺なし。・・

### 阿彌陀さまの声を聞く身となる

善導大師が説かれた『二河白道』は、『浄土へ往生しようと願う人々への呼びかけ』です。私たちは「死んだらおしまい、いずれ真つ暗なところに落ちていく」と思い、『阿彌陀さまの智慧の光に照らされて生きていく世界がある』とは考えていません。しかし、自覚のあるなしに関わらず、阿彌陀さまのお浄土に生まれていく存在であります。

阿彌陀さまの呼びかけに呼び覚まされ、往生の道があることを知らされ、その道を生きる身となることが用意されているのです。呼びかけに出遇うことそがわが身をていねいに生きる根本なのです。

『たとえば、人あって西に向かつて歩もうと思った時、その道のりは途方もなく遠く感じられた。』と、述べられています。『人あって』とは、日頃当り前に生きてきた人が、壁に突き当たり、当り前で

は済まされずに、初めて生き方の虚しさを感じて、人としての自分を問い直す歩みを始めます。

『西に向かつて歩もうと思った』とは、自分は少しも気づいていなかった願いが、自分の奥底にはたらいっていた。つまり人間として生きてきたことは、思いがけずも魂の故郷を尋ねつづけて生きていたのです。生老病死は、すべて自分の帰るところ(阿彌陀さまの浄土)を願ういのちの歩みと言えないでしょうか。

しかし、その道を歩まんと立つ人のまえには、『その道のりは途方もなく遠い』と、果てしなく未来がどこまでもひろがっているのです。

わが身がかかえる罪業の根深さにはいかんともできず、光を求めてさ迷うわが身が感じ取られてきたのです。帰るべき故郷・歩むべき確かな道はあります。帰るべき故郷・次回は『二河白道』の本題になります。

## 22組同朋大会開催される

三月十八日、二十二組の同朋大会が開催されました。大会は二年ぶりで二十二組の各寺院・ご門徒の皆様百二十名のご参加がありました。木全峰昭二十二組組長の挨拶の後、笹原留似子氏（復元納棺師）に「死を見つめて生を知る」〜復元ボランティアと呼ばれて〜と題して、ご講話をしていただきました。

笹原氏は岩手県北上市にお住まい。納棺師とは、亡くなられた人を見送る現場で、故人を安らかな表情にお戻しし、身体を清らかにして仏衣をととのえ、棺にお納めします。納棺師は、映画「おくりびと」で広く知られるようになりました。

「納棺師は、家族の死という深い悲しみのなかにいらつしやる方に寄り添わせていただき、残された方が死を受け容れ、お見送りをされるお手伝いをする職業です。わたしがこだわってきたのが『復元』です。故人がどんな状態にあったとしても、生前と同じ表情、できるだけ微笑みをたたえたお顔にします。故人の表情をつくるのではなく、『元に戻す』ことは、遺族のご家族が故人としか

り向き合い、死の事実を受け止めるために大切だと思います」

「六年前の東日本大震災の時、突然、死に追いやられた何万人もの方々の見送りが出来ない状態が少なからずありました」  
笹原さんは、「納棺師として、ご家族・故人の力に少しでもなれないか」と想い、被災地の安置所を巡って、復元ボランティアを始められました。

「三百名の震災津波による被災死の方への『復元』に携わりました。その中のおひとりで、肥田さんのご家族（ご主人と九歳から一歳の四名のお子さま）の亡くなら



同朋大会で講演される笹原氏

れた奥様の復元の様子がNHKスペシャルで放映されました。震災から四十二日目に見つかった奥様で、撮影許可をいただき『自宅に連れて帰りたい』とのご主人の希望で復元を施し、家族との最後のお別れをしてもらいました。『おかあさんだ！おかあさんだ！』との子供たちの声が上ががり、奥様の最後の笑顔に会っていただけたかなと思えました」

笹原さんは、「いのちの授業」を、各地で開催され、今回の東日本大震災で大切な家族を亡くした方々の様子と現在の被災地の状況をお伝えする活動をされています。「現代は葬儀が形式優先になっており（3面に続



笹原留似子著「震災絵日記」より

(2面より) 死ときちんと向き合う機会を失ってしまいます。生きることと死ぬことは、背中合わせだと感じます。悲しみの向こうに、悲しみとともに生きる方たちの深い笑顔があります」

「大切な人を失った悲しみと向き合うことが、同時に当り前の日常がどれほどかけがえないものであるかを確認することでもあります」おはなしをお聞きして、家族を亡くされた皆様に寄り添うことが、わたしの大切な使命ではないかと強く思いました。

休憩の後、参加者の皆様と懇親会会場に移動し、最初にアトラクションとして、二十二組のコーラス(百花繚乱)による「竹田の子守歌」「バラバラでいっしょ」の合唱の披露があり、その後、懇親会が開催されました。



熱唱する(百花繚乱)の皆様

## 春彼岸法要勤める

三月十六日、八事霊園墓地に於いて、春のお彼岸法要をお勤めいたしました。朝から晴天に恵まれ、大勢の皆様にご参詣をいただきました。

永代供養墓には、五十名を越す皆様がお参りされました。お勤めをする中、参拝者お一人お一人に亡き方々を偲んでお焼香をしていただきました。



永代供養墓での彼岸法要

## 仏旗・五色幕を掲げる



寺院で法要をお勤めする時、仏旗や五色幕を掲げることをご存知でしょうか。安楽寺では、春秋の永代経法要には、仏旗を、毎年十一月の報恩講法要には、五色幕を掲げています。(如来の精神や智慧を五つの色で表します)

**紫** 如来の毛髪の色で、力強く生き抜く・禅定を表す

**黄** 如来の身体の色で、ゆるぎない性質・金剛を表す

**赤** 如来の血液の色で、慈悲のこころ・精進を表す

**白** 如来の仏齒の色で、清らかなこころ・清浄を表す

**緑** 如来の袈裟の色で、耐えて怒らぬ・忍辱を表す

# 仏教豆知識

第二十七回



## 日本の仏教

歴史 その⑩

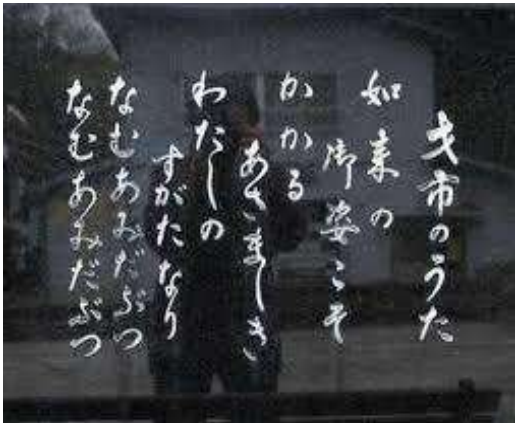
### 江戸時代(下)

一六六五年(寛文五年)東本願寺に高倉学寮が設けられましたように、各教団では教学の研究・僧侶養成のために学林・壇林という機関が設置されました。現在の各教団の宗学は、江戸時代の研究をもとに成立したものとされています。教育の研究機関が整えられた反面、江戸幕府の政治的意向や本山・宗主を頂点とした教団の封建的体制が形成・確立されていきました。

浄土真宗の教化活動で問題となったのは、「王法をもって本とし、仁義をさきとして」(御文三帖十二通)という言葉に代表される世俗との関係でした。王法は天下を安穩にし、身を治め、家を整える「齊家治身の法」とされ、王法遵守を強調された教えは、江戸時代の封建倫理に則したものでし

た。蓮如上人の「王法をもっておもてとし、内心には他力の信心をふかくたくわえて、世間の仁義をもって本とすべし」(御文二帖六通)などは、当時の社会状況を反映した言葉が、教化説法の場でよく話されました。

また本願寺派の仰誓が「妙好人伝」を編纂したことから、真宗では妙好人が注目されるようになりました。妙好人とは念仏の篤信者のことをいい、彼らの日常生活における言動・行実がひとつの真宗人像として語られました。香川の庄松(しようま)や島根の浅原佐市(あさはらさいち)が有名ですが、彼らは船大工や履物屋をしながら、阿弥陀仏に日々感謝し、阿弥陀仏と一体となった境地を詩歌で詠んで、気持ちを表現しました。



東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故から六年、廃炉の見通しは不透明な状況が続いています。原発により被災された皆様の郷里への帰還は遅々として進んでいません。昨年は熊本や鳥取でも大きな地震がありました。▼昨年十月、台湾民進党政府は二〇二五年までに原発ゼロとする政策を決定しました。台湾は日本同様、火山活動が活発な島国で、地震が多く自然災害による原発事故のリスクが高いことと、福島島の教訓を政策に反映させるべきとの声が政治を動かしたのです。▼太陽光や風力・地熱による発電で、原子力に代わるエネルギー供給を目指しています。産業への影響も大きいと言われていますが、脱原発のモデルとなるよう期待して注目したいと思います。▼一方、日本政府の政策は原発再稼働であり、「世界一厳しい審査」といつ「合格」した原発から稼働させています。放射性廃棄物の処理は、子孫に後回しにし、増え続ける状況は解決されていません。再稼働は日本の選択として正しいとは思えません。エネルギー政策は、いま立ち止まって全国民で熟慮すべき時だと思えます。